

実績報告書

① 基本事項

所属 総合研究大学大学院 (SOKENDAI) 文化科学研究科地域文化学専攻

氏名 林 麗英

海外派遣先 台湾

海外派遣先大学・所属 国立台湾史前文化博物館 (NMP) 南科分館籌備處

海外派遣期間 2012年7月25日から9月14日まで

② 海外派遣先大学について

台湾東部の台東市康楽駅南にある国立台湾史前文化博物 (National Museum of Prehistory) は卑南遺跡の発掘から始まった。面積約 10 ヘクタールで、1990 年史前博物館準備委員会を設立、2001 年から仮開館、2002 年 8 月 17 日に正式に開館し、台湾先史文化保存と研究の発展の基礎を作った。考古遺跡と自然生態公園 (卑南文化公園) を含む博物館でもある。2012 年 6 月より、国内外からの訪問研究員と、大学院修士課程以上の大学院生訪問研究を受け入れ制度が取り始めた。

NMP ホームページ <http://www.nmp.gov.tw/> 中国語 (繁体字)、日本語、英語版

③ 海外派遣前の準備

海外派遣事業申請する前に、博士論文の全体構成について作成してみた。しかし、その後既存資料を検証するうちに補足資料および実証的研究が必要であると考え始めた。

博士論文に関する研究計画と研究活動は、すでに 2008 年夏の基礎調査が始まるころに受け入れ先 NMP の林 志興副研究員と楊 正賢助教 (2012 年 9 月より、国立東華大学に着任) の引率を得て、調査地に定着するようになった。とりわけ、両氏は人類学専門、台湾の先住民族研究に携わっているため、研究活動実施以来、多くのアドバイスや関連する先行研究などの助言を得られた。

受け入れ先で個人研究室をもっていないため、研究資料に関する討論は基本的に林 志興副研究員の研究室で行われた。また、資料作成に必要なコピー機やプリンター機、パソコンの使用と文献、郵便物の保管は同研究室の一角を使わせていた。ほかに、NMP に付属する図書室は、一般公開しているため、平日の利用が可能である。こうした整えた研究施設と人脈に恵まれ、毎回のフィールドワークに新たな知見を取得することと同時に、自分の研究視野を広めていくことができた。

今後、補足資料と実証的研究の結果を踏まえて、博士論文の全体構成を組み替えていくことである。その一部の成果は、本校の文化科学学術交流フォーラムで発表する予定である。そして、全体構成の要約は後期の論文ゼミナールで発表する予定である。

④ 海外派遣中の勉学・研究

本研究は、主に調査地で聞き取り調査および参与観察を行うため大学のサマースクールに授業登録したのである。そのかわり、現地ではわたしはフィールドワークの研究手法だけ取り入れず、受け入れ先の教員あるいは原住民族研究に携われる研究者、ネイティブの文化的活動家・実践貢献者

(台湾では一般的文史工作者とよばれる；以下、文史者)との意見交換や討論を研究活動の一環として行ってきた。訪問対象となる文史者の多くは、ローカルの役場か学校、NGO・NPOなどに携わられているため、台湾の先住民族に関する文化的活動の動向を直接確認することができる(写真2)。つまり、文史者たちは先住民族地域・村でアクターのような役割をはたしているといえるかもしれない。ただ、夏休み中では、先生方や研究員の出張や新学期(9月入学)に迎える準備などが多いので、その打ち合わせ時間を取れない場合もあった。このため、毎年夏休み終りかけに開催される「台日原住民研究フォーラム」になるべく出席するようにこころがけている(写真6)。そこで、台湾各地から出席する先住民族研究者や文史者との交流や情報交換する機会が得られる。

⑤ 海外派遣中に行った勉強・研究以外の活動

調査地台東県では、亜熱帯農業の生産は経済的根幹となっている。このため、地域・村の自然的・文化的生態環境は台東の観光資源として第三次産業の開発において欠かせないことである(写真3)。とりわけ、台東では、南島文化(オーストロネシア文化圏に意味する)のイメージを与えるため、積極的現地の先住民族に関する文化的活動や手工芸、独自の産業などを積極的に台東の地域振興計画に組み込まれている。ちなみに、7月から9月にかけて台東における先住民族地域・村(8民族)の公的イベント以外、台東県庁が主催する南島文化芸術フェスティバル(写真4)と近年のアミ族の瑪卡吧嗨(makabahai)がある。私は太麻里郷金針山の金針花(ユリ科)花見の開幕イベントに招かれ、アミ族の舞踊団体と一緒に踊り練習を行い、出演した。また、先住民族地域における文化復興・文化産業活動の動態を知るため、中部タイヤル族村のタイヤル族の maho ; ubon (先祖の墓参りをする)に参加し、1992年に設立されたタイヤル族の染織文化研究センターで1999年(921大地震)災害後に関する地方の文化復興プロジェクトの成果を見学した(写真5)。そして、台東における先住民族の生存保障および文化保存計画に関する座談會に出席し、現地調査で考察した先住民族文化産業(特に在地農業の維持)に関する個人的意見を述べた。時々、インフォーマントや村人と打ち合わせするため、町に出て食事したりローカルの勝地への散策を行った。

⑥ 海外派遣費用について、

台東では、町と村との交通手段は都市部ほど発車回数が少なく、マイカーにたよっている地域である。滞在中、調査地近辺以外、ほとんど車か電車、バスで移動したので外食が多かった。

交通費に関して、調査地から台東市までのバス料金は、片道距離は約50分、86元；台湾ドル(日本円260円程度)である。現地の人によると、1990年代ごろは在来線電車(台鉄)が村に止まったが、人口流出、車増加などのため廃棄された(写真1)。また、現地のひとによると、バス代は電車代と比べて安くない理由は、通学生以外、日常生活に乗る人が少ないからである。たとえば、大型の春休み、夏休みまた、短期の祝日、週末のときは年長者か外出者が多くみられる。

宿泊先は、移動しやすいため町周辺の民宿やビジネスホテルで泊まった。しかし、夏期間中、家族

旅行や学生のサークル活動などが多いため、普段格安の民宿やホテルはこの時期になると宿泊代金を値上げする場合ある（たとえば、基本料金より100元～200元ぐらいアップする。旧暦新年連休中は、倍以上値上げすることもある。こうした予想外の状況において、調査終了までは最低限の宿泊費と交通費を確保することがもっとも大事だった。出費が派遣経費とほぼ同額であった。

台東地域の食生活にかかわる食料資源は、地産地消より外部（西部、北部）に依存する傾向が多くみられた。1人当たりの消費単価がそれほど安くはないとよくいわれている。町の定食の場合は、一食あたり80元～150元である（平均354円）。そのほかの消費代金たとえば、喫茶店、コンビニなどの商品単価は、ほかの都市部の値段とあまり変わらない。例として、有名な飲食チェーン店スターバックス、マクドナルド、ケンタッキなどである。また、インフォーマントがおすすめの地元経営の喫茶店では、コーヒー50元（150円程度）から100元までである。以上述べてきた飲食代金は、インフォーマントたちがよく訪ねる店（私も連れて行ったことがある）のメニューから参考例として取り上げた。2012.7.25、日本円→台湾ドルの為替レート1TW\$= ¥3.03（5%オフを含む）。

⑦ 海外派遣先での語学状況

調査地での会話は、中国語を中心に行ってきた。パイワン族語は場合によって使ったが、その場合は、なるべく通訳できる人と同伴して内容をもう一度解釈してもらったりあるいは中国語と原住民族言語（パイワン語）両方ができる人と会話するパターンである。

実際、博士後期課程1年生のときに言語学に関する基本的音声の表記記号を学んだので、パイワン族にかかわる生活用語の記録ができた。が、現地でパイワン族語スクール（族語教室）に申し込む機会があったが、滞在期間の都合により定期的に参加することができなかった。

⑧ 海外派遣先で困ったこと

フィールドワーク中、なるべく多くの時間は訪問や観察、相談に使おうと考えたので、パソコンやインターネットに触る機会が少なくなる。そのかわり、携帯電話で現地の人々との連絡手段がもっとも効率的便利であるため、電話代が大きな出費となった。また、調査地のパイワン族の知名度は、同村のアミ族、漢人と比べれば圧倒的優位になったため、外部の私はその間にはさまれ、パイワン族以外の人たちとの友好関係づくりが無視できないと感じた。

⑨ 海外派遣を希望する後輩へアドバイス

海外での暮らしや対談などの経験は、人生に何度もない機会かもしれないが、なるべく出発する前に訪問先に関する環境や生活リズム、習慣などをよく理解し、現地を学ぶという姿勢が欠かせないのである。

⑩ 研究活動の期間中に訪問した先住民族地域（村）・施設



アワの有機栽培予定地

写真1 調査地の近くに廃棄された駅



写真2 ローカルのNPO主催するパイワン族の民間信仰の祭司研修会



写真3 太麻里郷の町に設置された災害復興の一環事業—手工業の技能訓練兼販売センター



写真4 台東駅にある南島文化藝術フェスティバルのポスター



写真5 苗栗県泰安郷象鼻村・つり橋、タイヤル族染織文化研究センターの所在地



写真6 台日原住民研究フォーラム懇親会のもてなし、モチ性アワで作られた伝統食品